

平成16-18年度科学研究補助金（基盤研究B(2)）研究成果報告書

「永青文庫細川家文書の史料学的解析による近世民衆生活・行政実態の比較史的研究」

課題番号 16320090

永青文庫細川家文書の史料学的解析

近世民衆生活・行政実態の比較史的研究

研究代表者 吉村豊雄

熊本大学文学部教授

平成19年3月

永青文庫細川家文書の史料学的解析

近世民衆生活・行政実態の比較史的研究

目 次

研究の概要	吉村 豊雄 ……	1
藩庁部局の行政処理と文書管理 －永青文庫「覚帳」の諸段階と文書形態－	吉村 豊雄 ……	9
永青文庫「覚帳」目録	……………	73
近世初期の紛争解決における村・地域・藩権力 －永青文庫細川家文書初期「覚帳」の研究－	稲葉 継陽 ……	83
災害復興の行政メカニズム －永青文庫「覚帳」一件文書の行政的編成－	吉村 豊雄 ……	113
永青文庫「覚帳」収録の訴願に見る幕末維新期の地域社会	三澤 純 ……	149

研究の概要

1、研究種目・課題番号・研究課題

基盤研究(B)2・16320090

「永青文庫細川家文書の史料学的解析による近世民衆生活・行政実態の比較
史的研究」

2、研究組織

研究代表者：吉村豊雄	熊本大学文学部教授
研究分担者：三澤 純	熊本大学文学部助教授
稲葉継陽	熊本大学社会文化科学研究科助教授
春田直紀	熊本大学教育学部助教授
足立啓二	熊本大学文学部教授
小林幸夫	熊本大学文学部助教授
黨 武彦	熊本大学教育学部助教授
鶴島博和	熊本大学教育学部教授

3、研究経費

平成16年度 3,900,000円

平成17年度 3,700,000円

平成18年度 3,700,000円

総 計 11,300,000円

4、研究会活動

第1回 2006年5月24日

足立啓二（研究分担者）「本研究会の基本方針について—中国史研究から
見た日本史研究—」、熊本大学文学部小会議室

第2回 2006年6月7日

三澤 純（研究分担者）「幕末維新时期熊本藩の地方役人と郷土」、熊本大学文学部第2・3会議室

第3回 2006年7月4日

足立啓二（研究分担者）「近代開始期から見た日本史研究への提言」、熊本大学文学部小会議室

第4回 2006年8月22日

今村直樹（名古屋大学文学研究科博士課程）「明治維新时期における藩社会の『遺産』と地域社会」、熊本大学文学部小会議室

第5回 2006年10月10日

吉村豊雄（研究代表者）「前近代日本社会到達の文書形態」、熊本大学文学部第4・5会議室

5、研究成果

(1) 著書・論文等

吉村豊雄「藩庁部局帳簿の行政処理と文書管理」、本報告書、2007年

吉村豊雄『新宇土市史 通史編中世・近世』（共編）、2007年

吉村豊雄「日本近世における津波復興の行政メカニズム」、『文学部論叢』89号、77-112頁、2006年

吉村豊雄「怨斎日録抄 幕末武家の時代相」1～158回、熊本日日新聞、2003-2006年

吉村豊雄「永青文庫細川家文書の史料学的解析による近世民衆生活・行政実態の比較史的研究」、『日本歴史』693号、22-24頁、2006年

吉村豊雄「宝暦の改革—その今日的意義」、『肥後学講座』熊本日日新聞社、107-131頁、2006年

吉村豊雄「天保・嘉永期阿蘇宮造営事業の仕組みと特質」、『阿蘇神社建造物調査報告書』、阿蘇神社・阿蘇市、33-42頁、2006年

吉村豊雄「加藤氏の権力と領国体制」、『加藤清正』、富山房インターナショナル、45-84頁、2006年

吉村豊雄『火の国と不知火海』（編著書）、吉川弘文館、2005年

- 吉村豊雄「天草四郎の実在性をめぐって」、『熊本大学日本史研究室からの洞察』熊本大学日本史研究室、189-217頁、2005年
- 吉村豊雄「日本前近代地方行政の到達形態と文書管理システム」、『世界的文化資源集積と文化資源科学の構築』（熊本大学拠点形成研究 平成16年度報告書）、98-127、2005年
- 吉村豊雄「近世水利事業の歴史的変遷をめぐって」、『下益城郡美里町旧中央町地区金石文遺物調査報告書Ⅱ 石は語るⅡ』、135-147頁、2005年
- 吉村豊雄「近世農村社会と武具をめぐる覚書」、『近世近代の地域社会と文化』清文堂、97-117頁、2004年
- 吉村豊雄『新宇土市史 資料編古代・中世、近世』（共編）、2004年
- 三澤 純「お姫様たちの西南戦争」、『文学部論叢』93号、73-109頁、2007年
- 三澤 純「戸田家の養蚕・製糸起業構想と第八大区会」、『2006年度古文書学実習調査報告書』Ⅱ、熊本大学日本史研究室、30-36頁、2006年
- 三澤 純「『水』をめぐる二つの記念碑から考えたこと」、『土木遺産を核とした野外博物館化による街づくりに関する研究』（熊本大学政策創造研究センター・プロジェクト研究報告書）、14-17頁、2007年
- 三澤 純「幕末維新时期熊本藩の地方役人と郷土」、『近世地域史フォーラム3 地域社会とリーダーたち』、吉川弘文館、151-176頁、2006年
- 三澤 純『安場保和伝』（共著）、藤原書店、63-119頁、2006年
- 三澤 純「村の内済文書と日本史研究室の研究計画」、『2005年度古文書学実習調査報告書』Ⅰ、熊本大学日本史研究室、9-14頁、2006年
- 三澤 純『新宇土市史 資料編近代・現代』（共編）、宇土市、2006年
- 三澤 純「民蔵問題と地方官」、『熊本大学日本史研究室からの洞察』、熊本大学日本史研究室、278-309頁、2005年
- 三澤 純『火の国と不知火海』（共著）、吉川弘文館、2005年
- 三澤 純「熊本藩金納郷土制度に関するノート」、『世界的文化資源集積と文

- 化資源科学の構築」、129-147頁、2005年
- 三澤 純「散髪脱刀令の成立過程と近代社会」、『近世近代の地域社会と文化』清文堂、374-189頁、2004年
- 稲葉継陽「日本中世・近世史研究における『地域社会論』の射程」、『七隈史学』8、七隈史学会、1-14頁、2007年
- 稲葉継陽「戦国時代の阿蘇氏と阿蘇文書」、『阿蘇の文化遺産』、熊本大学、83-95頁、2007年
- 稲葉継陽『新宇土市史 通史編中世・近世』（共編）宇土市、2007年
- 稲葉継陽「石造物と地域史研究」、『日本歴史』693号、97-105頁、2006年
- 稲葉継陽「室町・戦国・近世の阿蘇文書」、『阿蘇家文書修復記念 阿蘇の文化遺産展』、熊本大学・熊本県立図書館、164-166頁、2006年
- 稲葉継陽「鬮引きで決まった藩領境」、『文学部論叢』86号、87-123頁、2005年
- 稲葉継陽「中・近世移行期の領域秩序と国郡制」、『歴史評論』647号、35-49頁、2004年
- 稲葉継陽「中世の柵と計量行為」、『日本の時代史 29 日本の環境』、吉川弘文館、175-196頁、2004年
- 稲葉継陽「戦国期北部九州における領国支配と村に関する覚書」、『荘園と村を歩くII』、校倉書房、67-91頁、2004年
- 稲葉継陽「境目の歴史的な性格と大名権力」、『定本 北条氏康』高科書店、368-338頁、2004年
- 稲葉継陽『新宇土市史 資料編古代・中世・近世』（共編）、宇土市、2004年
- 足立啓二「日本社会の展開—世界史的に見た日本中世～近世」、『世界的文化資源集積と文化資源科学の構築』、49-67頁、2005年
- 春田直紀「中世阿蘇社と阿蘇文書」、『阿蘇の文化遺産』熊本大学、41-59頁、2007年
- 春田直紀『新宇土市史 通史編中世・近世』（共編）、2007年
- 春田直紀「中世阿蘇社と帳簿資料」、『阿蘇家文書修復完成記念 阿蘇の文化遺産』、熊本大学・熊本県立図書館、160-163頁、2006年
- 小林幸夫「清代の地方志鑒定制度」、『文学部論叢』93号、111-134頁、

2007年

鶴島博和「11世紀イングランドにおける文書と荘園」、『世界的文化資源集積と文化資源科学の構築』、148-157頁、2005年

黨 武彦「東京大学東洋文化研究所蔵『永定河工錢聯票』について」『世界的文化資源集積と文化資源科学の構築』、184-200頁、2005年

(2) 学会発表

稲葉継陽「日本中世・近世における地域史研究の射程」（七隈史学会大会シンポジウム報告、福岡大学）、2006年

吉村豊雄「前近代日本社会到達の文書形態」（第39回日本古文書学会招待公開講演、熊本大学）、2006年

三澤 純「幕末維新时期熊本藩の地方役人と郷土」（名古屋歴史科学研究会他2団体合同研究会、名古屋大学）、2006年

春田直紀「By-Laws : record of Legal Control on the Environment in Medieval Japan（村の掟—中世日本における環境規制の記録化）」International Medieval Congress（国際中世学会、リーズ大学）2005年

黨 武彦「Documents in 12th - Century China」（International Medieval Congress（国際中世学会、リーズ大学）、2004年

6、研究の経過と成果

本研究は、熊本大学において歴史学系教員に民俗学、日本語・日本文学の教員を加えて組織した共同研究の一環をなすものである。この共同研究組織は何度かの科研費による共同研究を行い、その後、平成15年（2003）には熊本大学において人文社会科学系での「拠点形成研究」の指定を受け、活動中である。本研究は熊本大学拠点研究メンバーのうち、歴史学系教員（日本史・中国史・ヨーロッパ史）を以って組織したものである。

本研究の中軸をなす日本史分野では、熊本大学附属図書館に寄託されている財団法人永青文庫（東京都目白台1-1-1）「細川家文書」の系統的解析を

行い、中世末－近世期の過程で成立・確立し、近代社会に内実化する日本型社会＝伝統日本社会の社会形態、社会統合形態について解明することを基本目的としている。史料解析の主対象としたのは、藩政の基幹帳簿で、民政・地方行政の担当部局＝郡方（郡問）系統の帳簿たる「覚帳」である。「覚帳」は、関連部局・他部局分を含めて、藩制初期の元和9年（1623）から明治4年（1871）に至る総数400冊に及ぶ長期系統的な帳簿群であるが、これまでの解析作業を通して解明できたのは、次の諸点である。

①熊本藩では、宝暦（1751－1764）の藩政改革を通して藩庁＝藩中央機構（奉行所）の部局化が進み、「覚帳」においても宝暦・明和（1764－1772）をさかいに郡方部局における稟議制的な行政処理・文書処理が進む。②さらに寛政期（1789－1801）以降の「覚帳」では、地域社会・村社会から提出される申請書・上申書（願書・伺書など）が郡方の部局審議の起案書として機能し、回議・決議という部局の審議が地域社会・村社会からの申請書・上申書に書き継がれる方式をとっている。③しかも「覚帳」では、地域社会・村社会からの申請書・上申書を含めて同一的・規格的な料紙（用紙）が使用され、多様な事案が申請・上申＝起案から決議に至るまで、あたかも白紙の冊子体に記録されたような形態をとっている。

郡方の部局帳簿「覚帳」では、手永（郡と村の中間行政区域）の惣庄屋や村の庄屋・頭百姓、一般の百姓が作成した申請書・上申書の原物がそのまま藩庁部局の起案書となり、これに回議・決議部分が書き継がれ帳簿化している。こうした地域・民間社会の上申文書を起案書と位置づけた行政処理・文書処理は、おそらく日本の前近代史において発想されなかった政治・行政形態であり、文書形態といえる。しかも「覚帳」には、地域社会・村社会からの申請書・上申書類を含めて、規格的と思わせる同一的な料紙が使用され、多様な事案が起案から決議に至るまで、あたかも白紙の冊子体に記録されたかのような形態をとっている。

以上のような解明事実から、本研究では、近世中期以降、熊本藩にみる近世後期の行政段階を次のように想定している。中央官庁たる藩庁から郡代を通じて広く地域社会に向けて規格的な料紙が配給される。地域社会・村社会は、惣庄屋あるいは庄屋・頭百姓の名で、所定の料紙を使い藩庁の民政・地方行政担

当部局＝郡方にさまざまな願筋・事業認可（特に水利・土木事業）・問題処理を上申する。こうした申請書・上申書は惣庄屋・郡代との事前調整・政策調整を経て行政ベースに乗り、郡方に受理される。郡方は申請書・上申書をそのまま起案書として部局官房の回議に付し、回議結果＝回答原案を作成して部局長＝郡方担当奉行の決済を仰ぐ。郡方からの回答は奉行から郡代に示達され、執行されることになる。近世後期藩庁の民政・地方行政は、地域社会・村社会からの申請・上申＝起案を稟議処理することで、その過半が達成される段階にある。

こうした「覚帳」の検討結果を踏まえつつ、本研究では次の3つの課題の検討と作業を進めた。本研究で明らかにいえた点を中心に、今後の展望も含めつつ現時点の理解を整理しておく。

第1に、「覚帳」の悉皆的整理・解析の作業を進め、地域社会・村社会のいかなる要求・要望が藩庁の部局稟議にかけられ、執行されたのかについて検討を深め、いわば民政・地方行政の起案から執行にいたる稟議制の全過程を究明することであり、さらに、そこから日本近世の行政過程・政策形成メカニズムを実態的に究明することである。熊本藩領の19世紀、幕末維新时期は「公共事業の時代」といえる程に水利・土木事業、農業インフラ整備事業がラッシュとなる。こうした経済政策の多くは、事案実現化のどこかの段階で、たとえば資金融通の面で、田畑面積・石高の変更の面で「覚帳」に反映され、遂行されている。藩経済政策の実質が地域社会・村社会の側で用意され、藩庁の部局審議と決済がこれをオーソライズする関係にある。

同時に、本研究では、今までに集積した手永・村の惣庄屋・庄屋、地主の文書群を点検し分析したが、地域や村の要求・要望や課題・問題が藩庁まで行かず、郡・手永・村段階＝郡代・惣庄屋・庄屋段階で処理され、解決・実現・政策化している事案が数多く存在する。むしろ多種多様な農村の地方文書を見た感じでは、こうした郡・手永以下の段階で解決・実現している事案が圧倒的に多い。資金融通や土地・石高の変更、領主支配の許認可を要するものなど、上申を要する事案を中心に「覚帳」は構成されている印象を持っている。

いわば非「覚帳」型事案と、藩庁の部局稟議にかけられ、「覚帳」に綴じ込まれた事案とが存在しており、本研究でも「覚帳」という藩庁の部局文書と惣

庄屋・庄屋などの地域文書を併行して分析しており、農村社会・百姓社会のさまざまなレベルでの団体的成長と、これを行政的に統合・管理した日本社会の仕組みが、ある程度実態的に提示できたのではないかと思う。

第2に、こうした近世中後期に確立する日本型社会、伝統日本社会の前後の時期、つまり南北朝・戦国から近世初期に至る伝統日本社会の形成過程、そして伝統日本社会の仕組みが編成替えされ、内実化する近代社会との連続過程を究明することである。いわば、南北朝・戦国から近代に至る系統的な日本社会史像を地域に即して描き出すことであるが、本報告書において、主に近世初期を対象とした稲葉論文、近世中後期を対象とした吉村論文、幕末維新期を対象にした三澤論文、この3つが相俟って、一応の方向性は示したのではないかと思う。

第3に、こうした日本型社会、伝統日本社会の展開史を国際比較史的に位置づけることである。とくに中国の「地方衙門档案」は「覚帳」と作成年代を同じくし、専制国家解体期の民衆政策を含む行政実態を示す史料群であり、熊本大学に意識的に集積を図ってきた。本研究のメンバーである足立啓二『専制国家史論』（1998年）で提起した中国社会像、統合性を欠く社会に立脚した解体期専制国家の膨大な行政・裁判史料が「覚帳」といかなる対蹠の実態を示すのか、本研究の研究会でもかなり煮詰めるところまで来ていたが、本報告書に反映することはできなかった。また春田直紀・黨武彦には、鶴島博和のコーディネイトで、イギリス・リーズ大学での国際中世学会で日本史・中国史の成果を報告してもらった。ヨーロッパ史を含めて、国際比較史的な検討は、課題として次の機会を待ちたいと思う。